大阪の都市空間を読む

3　健康都市の建設　- 大阪の「都市美」を支えた「都市醜」派

大阪都市計画史研究会　中島　直人

中島　直人（なかじま　なおと）
1976年東京生まれ。東京大学大学院工学系研究科都市工学専攻　助教。博士（工学）。
専門は都市デザイン、まちづくり論、都市計画史。近代日本の都市美運動に関する研究で、これまでに日本建築学会奨励賞、日本都市計画学会論文奨励賞等を受賞している。『近代大阪と都市文化』（共著、清文堂、2006年）では、大阪の都市美運動についてより詳細に解説している。主な著書に、何れも共著で『景観法を活かす』（学芸出版社、2004年）、『都市美　景観施策の源流と展開』（学芸出版社、2005年）。

1　「都市美」と「都市醜」

1935年７月12日の午前11時から、中之島公園で来賓600名を集めて「中之島美観地区明粧化」工事の竣工式が開催された。中之島一帯は大阪城付近や御堂筋沿道とともに前年の1934年12月に我が国二番目の美観地区に指定されておりこれを機に整備事業が実施されていたのである。新聞報道によれば、堂島、中之島、西天満、愛日の各小学校の生徒1700名余りが、大江、淀屋両橋を渡って中央公会堂まで小旗を振って行進し、祝いの祭典を盛り上げたという。

近代大阪の「都市美」の誕生日とも言えるこの日の夜、21時30分に大阪駅を発車する夜行列車で東京に向かう男がいた。この年に大阪市衛生試験所長から大阪市保健部長に抜擢されたばかりの藤原九十郎である。藤原の東京出張の目的は、大阪の新しい都市建設案についての内務省担当官との相談、そして東京市内の施設視察であった。何故、保健部長の藤原が都市建設なのか。藤原が大事そうに抱えていたのは「「健康都市」建設案」と名付けられた書類であった。

この日からすでに70年以上が経過した現在でも、大阪の都市を代表する都市空間は間違いなく中之島一帯であろう。本連載の第一回、第二回で取り上げた大阪駅前や御堂筋と同じく、近代大阪の都市計画が生み出した都市空間遺産である。

この中之島一帯は、美観地区指定当時から、大阪を訪れる都市計画家たちに強い印象を与えた。例えば東京出身で、1935年に大阪府技師に転任になり、初めて大阪で暮らすことになった亀井幸次郎は、「美観地区などを目標としたようなシビック・センターが、徐々に実現される」様子に感嘆し、次のように述べている。

「大阪人ほど大阪市を愛している市民はないと痛切に感じました。大阪の悪口を言おうものなら船場のあんちゃんから大阪の府庁のお役人まで、大阪の良さを強調して止まない。所が其の愛都心を植え付ける中心は何処にあるかというと、やはり中之島を中心とする所であります。水があり、緑があり、そうして大阪市庁舎を中心にしたシビック・センターが、曲がりなりにも中心を成して居ります。」（『都市美』、21号、1937年）

亀井は大阪の美しいシビックセンターが大阪人の大阪に対する愛情の醸成をもたらしていると指摘している。亀井に限らず、大阪内外の都市計画家たちが同様の感想を残している。

しかし、こうした高い評価を横目に見ながら、少々異なる問題意識を持っていた人々もいた。例えば、大阪市助役を務めた瀧山良一は次のように言う。

「市内の美観地区と云われる中の島附近ー土佐堀川の如きは、悪水滔々と流れ湧くの現状である、大阪に於て都市美を論ずるもの先づ一考せざるを得ない状態である」（『健康都市の建設』、1937年）

また当時、大阪市保健部清掃課長を務めていた山崎豊は、美観地区などは「小部分の地区に関すること」に過ぎないとして、次のように述べている。

「然らば結局大部分の建築物は灰色を基調とした、商店と住宅の長屋群である、煤塵にとざされた小工場の群集である。而も随所に塵芥を堆積した空地が都市醜を露出している有様である」（『健康都市の建設』、1937年）

つまり、瀧山も山崎も、美観地区の「都市美」以前に、悪水、煤塵に塵芥といった「都市醜」が気になって仕方が無かったのである。大阪の「都市美」の誕生の日に東京へ向かった藤原は、こうした「都市醜」派を代表する人物であった。

戦前期の中之島の様子　大阪市役所を中心としたシビックセンター　（筆者所蔵）

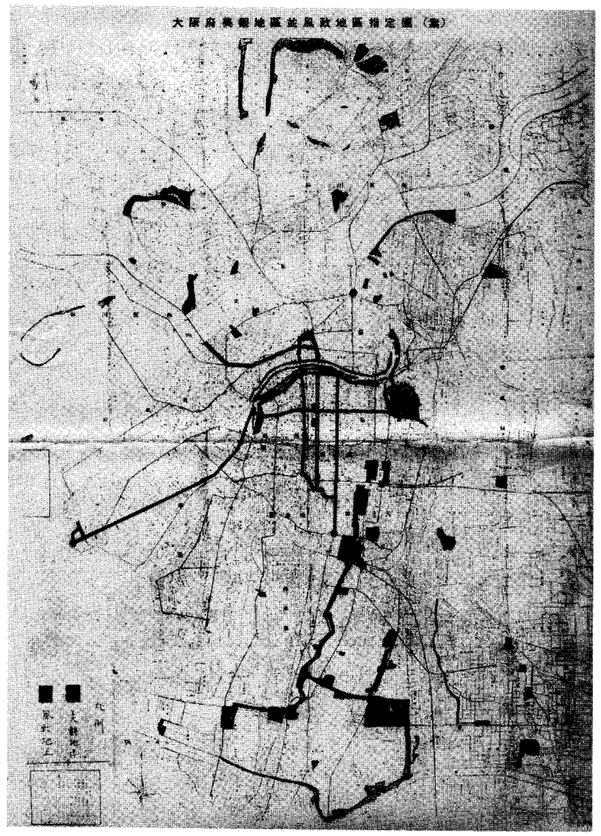
2　大阪の都市美運動

我が国において、「都市美」という言葉が一般に定着するのは、1923年の関東大震災後の東京にて、復興を機に、美しい帝都を築き上げようとして開始された民間運動である都市美運動を通じてであった。この運動を担ったのは、1926年10月に設立された都市美協会であった。

都市美協会は、途中から東京市からの多大な支援も受けて、東京を舞台に緑化思想を啓蒙する植樹祭や舗装街路や復興建築を称揚する道路祭、建築祭などの市民を巻き込んだイベントを開催した。また、美しい風景にそぐわない建築物の設計変更や美観を乱す屋外広告物の取締りの強化、建築物の意匠を美の観点から審査する都市美委員会の設置などを要求する建議を提出するなどの活動を展開した。加えて、都市美協会は都市美運動を全国に広めることにも腐心し、全国の関係者が一同に会し都市美に関する研究発表を行う全国都市美協議会を主催し、全国から数百名の参加者を集めた。

この都市美協会の活動に刺激を受けて、大阪でも都市美運動が開始された。大阪で都市美運動の口火を切ったのは、我が国で最初の都市計画の研究者でもあった建築家・片岡安が率いる日本建築協会による美観地区・風致地区指定運動であった。日本建築家協会は大阪府に対して、都市美の観点から建築物の形態や意匠をコントロールする美観地区と、都市内の美しい自然景観や歴史景観を守る風致地区を早急に指定するよう働きかけたのである。片岡らが示した指定案は壮大なものであった。美観地区指定候補地として、大阪駅前と御堂筋、そして中之島を中心に、天満橋市電交差点など鉄道や市電の主要駅の駅前や築港大桟橋前広場といった大阪市のゲートとなる地区、主要街路・河川沿い、公園周囲などを選定した。風致地区指定候補地は、将来公園に指定される予定であった第二次都市計画公園及び墓地、川岸地、臨海部、池、樹林地、神社境内などであった。

結局この提案はほぼそのまま当局に受け入れられ、1933年４月には、千里山一帯や主要河川の沿岸、平地部の神社仏閣の境内地を中心に、25地区1953ヘクタールの地域が風致地区に、1934年12月には、大阪駅前から難波に至る御堂筋、中之島を中心とした河岸一帯、大阪城付近、上本町駅、阿倍野橋駅付近などが美観地区に指定されたのである。



日本建築協会による大阪府美観地区並風致地区指定図（案）　建築と社会（1930）、12輯4号

都市計画によって都市美を創造ないし保全していこうとするこうした運動とほぼ同時期に、大阪都市協会による都市緑化運動も開始された。東京の都市美協会による植樹祭から３年遅れの1929年３月に、第一回大大阪緑化運動が開催された。教育関係者向けの緑化講演、一般市民を対象とした講演会、ラジオ放送、草花種子半値販売、植木廉価市、緑化運動行進といった多彩な催しを通じて緑化思想の普及を図った。大阪市内には、大阪毎日新聞社寄贈の短冊形の緑化ポスター三万枚が張り出された。主要百貨店のショウウィンドウは緑化の意匠が施され、各電車内には緑化広告が、市電切符の裏面には大丸百貨店が寄贈した緑色刷の緑化宣伝広告が掲載されるといった徹底ぶりで、以降、毎年の恒例行事となった。

大阪の顔をつくる美観地区や風致地区、一般市街地に緑を増やす緑化運動というこの二つの「都市美」の流れに、やがて「都市醜」の除去を主目的とした「「健康都市」建設案」が合流するのである。

3　『健康都市の建設』へ

大阪の都市美運動が進展を見せるのは、1937年３月に、大阪ロータリー倶楽部と大阪都市協会が協働して、大阪都市美委員会を設置してからであった。大阪都市美委員会は、「都市美を強調し、都市美に関し実際と適応する調査研究を遂げて